

ついて明らかにする。

彩の国発の地域基盤型 IPE —4 大学連携力育成プロジェクトの目指すもの—

新井利民 (埼玉県立大学保健医療福祉学部)

1. 埼玉県における IPE の展開 埼玉県立大学は、1999 年の開学以来、保健医療福祉分野の専門職連携教育 (IPE : Interprofessional Education) を充実・発展させ、その後 2008 年より埼玉医科大学医学部学生との地域基盤型 IPE 実施している。これは埼玉県立大学の 4 年生と、埼玉医科大学医学部 4 年生の合わせて約 450 人が、約 5-6 人の学科混合チームを組み、埼玉県内約 80 か所の協力施設・機関において、4 日間にわたって合同実習を行うものである。このプログラムにより、自らの専門性を発揮しつつ、他の専門領域のチームメンバーと共に質の高い専門職連携実践を行うための力を養うことを目指してきた。

2. 「彩の国連携力育成プロジェクト」の目的と展開 「彩の国連携力育成プロジェクト」は、これまで二大学間で実践してきた教育プログラムをさらに進化・深化させるため、同じく埼玉県内にキャンパスを持つ城西大学及び日本工業大学を加えて、様々な取組を構想・実施している。従来の専門領域に加え、薬剤師・管理栄養士を目指す学生や、住空間や福祉空間デザインを専攻する学生などとも一緒に学ぶ場を創出し、多面的かつトータルに、そして患者・利用者・地域住民を中心とした「チーム」によって、地域住民の暮らしを支えることのできる「連携力」を養うことをねらいとしている。

3. 地域基盤型 IPE の今後の課題 本プロジェクトはこれまで 4 大学の共同学習プログラムを開発・試行し、各大学の正規のカリキュラムに段階的かつ地域指向の IPE が位置づけられるよう協議を重ねている。また、薬学教育における IPE の重要性や、ケアと空間の関係性、地域包括ケアにおける連携の実際などについて、講演会・研修会を行ってきた。

病院機能の再編が予定され、また高齢期の住まいへの注目がなされる中で、今後は患者・利用者・地域住民を中心として、「保健医療福祉の専門機関」と「住まい・生活の場」とをトータルにとらえた援助が必要不可欠である。4 大学連携による地域基盤型 IPE は、このような新しい時代をになう専門職の「連携力」を養うことを、関係者をはじめとする「県民参画」によって行うものである。今後は、地域の先駆的な連携実践の教材化を進め、学生のみならず県内の関係者への研修などにも役立てていく必要がある。

地域ニーズに応える薬剤師の育成

細谷 治 (城西大学薬学部)

今日、薬剤師を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、病院においては、がんや感染症あるいは精神科領域などの専門薬剤師が求められている。さらに薬物療法に伴う副作用モニタリングを目的とした薬剤師によるフィジカルアセスメントが実施されるようになり、薬剤師の職能拡大と共に、それらも徐々に評価され始めてきた。しかしその一方で、ドラッグストアや地域の薬局においては、医薬品のネット販売開始を機に、本来患者の安全を担保するための医薬分業における薬剤師の役割についてまで、一部で否定的な議論が持ち上がっている。そのような状況のなか、医薬品の適正使用など社会的ニーズに応えるべく、医療人として相応しい質の高い薬剤師を養成するためにスタートした 6 年制薬学教育も今年で 7 年目を迎え、現在、薬学教育モデルコアカリキュラムの見直しがなされ、2015 年には、新・薬学教育モデルコアカリキュラム (以下、新コアカリ) に則った新たな薬剤師教育が実施されることになった。新コアカリでは多職種連携協働やチーム医療、さらには地域における薬局および薬剤師の役割などに関する項目が、より明確となった。現在、埼玉県内の 4 大学 (埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学) による「彩の国連携力育成プロジェクト」として実施している IPW 実習は、まさに薬剤師養成教育の新コアカリを先取りしたものである。

2014 年 1 月、本学薬学部薬学科の 4-6 年生を対象とした後期選択科目の「緩和医療学」をベースに、本プロジェクトの一環として『緩和医療学・IPW 演習』を実施した。この演習ではがん終末期の非常に難しい症例について「患者

の退院希望に応じるべきか否か!?!」との問題に、参加した医学生と薬学生の混成グループが退院の是非に分かれて議論し、患者やその家族に対するケアプランの作成を行った。この時4大学の教員と地域で在宅診療を専門に行う医師がファシリテーターとしてグループディスカッションをサポートした。参加した学生からは「他学部生との合同演習により、視野が広がり、単一学部生同士とは違った視点で物事をみる重要性を感じました。」などの意見が聞かれ、自分以外の専門職種の考えに触れることで、自らのプロフェッショナリズムを意識したようであった。薬学教育における専門職連携教育の可能性を改めて実感した。

保健医療福祉分野の IPE に建築系学生が参画する意義と可能性

勝木祐仁（日本工業大学工学部）

「彩の国連携力育成プロジェクト」は埼玉県立大学が先駆的に実施してきた保健医療福祉分野における IPE（専門職連携教育）を4大学で実施するものへと発展的に展開させるものである。参加大学は埼玉県立大学（保健医療福祉学部）、埼玉医科大学（医学部）、城西大学（薬学部）、日本工業大学（工学部）の4大学である。日本工業大学からは建築系の生活環境デザイン学科が中心に参加している。保健医療福祉分野の IPE に工学部の学生が参加する試みは他に例がみられず、本プロジェクトの特徴の1つとなっている。ここでは2013年に実施した4大学による「IPW 実習」の試行の概要を示すとともに、建築系学生が参加したことの影響について考察する。その上で建築系学生を含む IPE の意義と可能性について考察を示す。「IPW 実習」は多分野の学生で構成されるチームが、保健医療福祉の現場で患者や利用者に対するケアをめぐる情報収集や議論を行うものである。建築系学生が参加した影響を、学生の自己評価に関する資料、ファシリテーターまたは見学者として参加した各大学の教員の報告等から分析した。学生のレポートから、建築系学生が当初は疎外感を感じる面もあったが、徐々に打ち解け、専門外で不明な点について積極的に尋ねることができるようになっていった過程が窺えた。建築的視点から対象者のケアに有益な知見を提示する場面も見られた。特に対象者の暮らしの総体に議論を広げ、患者や利用者を生活者として捉える視点を示す場面がしばしば見られた。教員の報告からは、建築系学生が施設、住まい、地域の空間を生活の場としてトータルに捉える視点を提供していた点が好意的に評価されている。こうした評価から「地域基盤型 IPE」において建築系学生が有益な役割を果たす可能性が窺える。しかし、そこで捉えられている建築系学生の存在意義は、部分的には建築分野の専門性に依拠するが、医療福祉分野の門外漢として日常的なまなざしを保持しているところに認められているとも言える。今後はより専門性を発揮しながら参加できることが望ましい。そのことは、ケアに対する環境デザインの可能性について、社会的認識を広めていく上でも有意義と言えよう。IPE への参加を前提とした場合、建築系学生がどのような素養を身につけておくべきか、議論と考察を深めていきたい。

秩父地域における地域基盤型 IPE の多職種連携促進の効果とこれからの可能性

大久保築世（小鹿野町保健課）

小鹿野町は人口約1万3000人、高齢化率31.15%の高齢化の進んだ町であり、保健師を中心に地域の中で予防活動や訪問活動を展開するなかで介護が必要な高齢者や家族の状況を把握し、在宅支援の課題解決や社会資源の活用など図り平成4年に在宅サービスの充実・連携をより強化するために保健・医療・福祉サービス調整会議を開始した。その後、在宅サービスの施設整備を進め、平成14年に町立病院を改築するに合わせ、総合保健福祉センターを病院内に移設し、町立病院を核とした地域包括医療ケアシステムを立ち上げた。急速な高齢化や疾病構造の変化に対する予防からリハビリまでの一貫した支援の提供や、介護保険導入後の住民のニーズに迅速に対応している。顔の見える組織化と定期的な各種カンファレンスにより、住民を中心にひとり一人の想いをつなぐ保健、医療、介護、住まいなどの生活支援サービスが切れ目なく、一体的に提供される体制をつくり、医師・看護師・理学療法士・保健師・管理栄養士・薬剤師・介護支援専門員などの有機的な連携を図っている。

看護部長として入職した平成20年度から埼玉県立大学の IP 演習を受け入れ、施設ファシリテーターとして、学生たちには現場の各専門職がどのような思いで患者・家族に関わっているのかを感じられるようにサポートを心掛けた。患者さんにはケアマネージャーが決まり退院支援に必要な関係職種がチームとして動き始めたタイミングでお願い

し、学生たちにはチームの一員としての参加を促した。学生の患者さんから学ぶ姿に現場の気づき
が生まれ多職種間の学びと連携が深まっている。

秩父地域では秩父専門職連携推進会議を中心に地域ぐるみで IPE の学びを共有するなかで、顔の見える関係が広がり、施設や地域、官民の枠を超えた IPW の促進につながっている。2009 年から患者・家族を主体にした連携を推進するために多職種の有志により検討を重ねてきた連携のツール「マイカルテ」は、秩父市を中心市とした 1 市 4 町からなる定住自立圏・ちちぶ医療協議会に引き継がれ、事務局を秩父郡市医師会に設置して 2013 年 10 月から「私の療養手帳」として運用が始まった。

地域基盤型の専門職連携教育と公衆衛生の人材育成

柴崎智美（埼玉医科大学 地域医学・医療センター）

埼玉医科大学医学部 4 年生は平成 21 年度より埼玉県立大学 4 年生の地域基盤型 IPE に、社会医学実習の一部として参加し、違う専門職を目指す同じ学年の学生と混成チームを作り、地域や対象者の理解と課題解決を目指し、チーム形成のプロセスを体験し、自らの体験を振り返ることを通して、お互いの専門性と自らの専門性を理解し、連携することの意義を学んできた。本学学生は、卒業間近の県立大学の学生との実習から多職種の仕事だけでなく、考え方や思いの特徴を知り、医師としてさらに専門性を高めるために学ぶことの重要性に気づくことがわかった。多職種とともに対象者の個別支援計画を作成することを通して、医師の専門性は診断治療のみでなく、その後どのように生活していくかを考えて治療することができる、連携できることであるという意見も多く見られた。そして、これらのチームとしての活動や連携は、患者さんを中心に患者さんのために行われ、患者もチームの一員であるということに気づく学生も多い。

公衆衛生の課題が環境・感染症から生活習慣病予防、健康づくりと変化していく中で、今後しばらくは高齢者の生活や子どもの健康で安全な生活を如何に支えるかということが課題になっていくことが考えられる。これらを支えるためには、多職種と真に連携できる医療人が求められている。地域基盤型 IPE では病院内で行われる IPE とは異なり、生活モデルに基づいた生活を支える視点を身につけることができる。社会学者の猪飼氏はその著書や講演の中で、将来期待される医療人は自分の専門だけを実践するのではなく、お互い重なり合った部分は柔軟に役割を分担し、患者中心に連携することが必要であるとしている。これは、決して臨床の場面だけではなく、公衆衛生の領域でも同じことがいえる。従来より、公衆衛生活動においては、医師、保健師、栄養士、行政職員といったような多職種連携が必須であり、ヘルスプロモーションでは住民主体の考え方が中心となっている。将来地域で役に立つ人材を育成するためには、卒前教育の段階から、治療医学だけでなく生活モデルを意識した教育を積極的に導入し、地域、さらには公衆衛生の重要性に気づき、関心を持って人を見ることのできる医療人を育成することが重要であり、将来的には公衆衛生の人材育成に役立つものと考えている。

(17) 日本福祉教育・ボランティア学習学会（平成 26 年 11 月 8・9 日、清瀬市）

大部令絵（埼玉県立大学大学間連携共同教育推進事業担当）、瀬戸眞弓（日本工業大学工学部生活環境デザイン学科）、勝木祐仁（日本工業大学工学部生活環境デザイン学科）

1 研究の目的 今日の保健医療福祉領域の問題を解決すべく求められる「患者・利用者・地域住民を中心に据えて、自らの力を発揮しつつ多職種と連携できる専門職」を育成するため、専門職人材養成に携わる教育機関では、専門職連携教育（IPE）が注目されている。患者・利用者・地域住民の生活の質の維持・向上を実現するには、サービス対象となる人々の生活空間に携わる工学部学生にも IPE 参加の意義があり、IPE 参加によって多職種理解やチーム形成の意義を学び、自身の専門性に対する意識向上にも効果があると考えられる。

上記を検証するために、本研究では、生活環境デザインを専門とする工学部学生が、保健医療福祉領域の専門職連携実習（以下、IPW 実習）を通じてどのような学びを得られたのかについて、学生の最終レポートの質的分析を通して明らかにすることを目的とした。

2 研究の方法 2013年8月のIPW実習に参加した工学部学生5名の最終レポートを分析対象とした。本研究では、IPW実習の担当教員3名により、最終レポートの文章を意味のまとまりごとに区切りカード化し、意味内容の類似性に基づき分類した。なお、本研究は埼玉県立大学倫理委員会の承認(受付番号 25095)を得て行われた。

3 結果 最終レポートより、417枚のカードが作成された。カードはまず、大分類として『私』『グループ』に関するものの2種に分けられた。『私』に属するカードは、小分類として、『自分の気づき』『他者の気づき』『用語の違い』『感情』『専門性の発揮』『工夫・努力』『利用者』『新しい』の8種に分けられた。また、『グループ』に属するカードは、『役割』『運営に対する提言』『ディスカッション』『ルール』『歩み寄り』『感想』『リフレクション』『打ち解ける』の8種に分けられた(Table参照)。

4 考察 先行研究では、多職種チームパフォーマンスを向上させるために、メンバー個々の専門職としての特性、またチームパフォーマンスを生む要因として関わる個人の特性を含む『インディビジュアル・コンピテンシー』と、チームパフォーマンスを向上させるチーム特性(知識・技術・態度)を含む『チーム・コンピテンシー』の双方が必要とされている(菊池, 2004)。本研究において示された分類も、大分類の『私』には、学部で学んだ専門性を活動に生かす態度や行動を示す『専門性の発揮』や、チーム形成のために行った『工夫・努力』、自己と他者の関係性から得られた『気づき』が示され、『グループ』にはチーム形成をより円滑に行うための『ルール』や『リフレクション』といった内容が挙げられており、大分類は先行研究の『インディビジュアル・コンピテンシー』『チーム・コンピテンシー』に対応する内容であり、工学部学生はIPW実習を通じて、専門職連携に必要なとされるコンピテンシーへの学びを得たと考えられる。

本研究においては、上記の学び以外に、実習を通じた『感情』も挙げられているが、内容としては、自己嫌悪やくやしさといった内容がみられている。IPWにおいては、連携を図る個人の力量や裁量が連携の促進要因や阻害要因に関連するという指摘もあり(吉池・栄, 2007)、今後はこうした個人としての感覚がIPEの学びに与える影響も検討し、より充実したIPEの開発や、既存のIPEの改善を図るべきであろう。

5 文献

菊池和則(2004)多職種チームのコンピテンシー—インディビジュアル・コンピテンシーとチーム・コンピテンシーに関する基本的概念整理. 社会福祉学, 44(3), 23-31.

吉池毅志・栄セツコ(2007)保健医療福祉領域における「連携」の基本的概念整理—精神保健福祉実践における「連携」に着目して—, 桃山学院大学総合研究所紀要, 34(3), 109-122

Table 分類結果

大分類	小分類	内容
私	自分の気づき	実習を振り返って理解した自らの態度と行動
	他者の気づき	他者から自分に対する指摘。他者と自分を比較して感じた専門職としての基準の違い。
	用語の違い	自らの専門分野あるいは他者の専門分野で使用されている用語に対する態度と行動。
	感情	自己嫌悪、もどかしさ、くやしきなど、実習中に抱いた感情。
	専門性の発揮	自らの専門性を活動に生かす態度と行動。分野を超えた意識の共有。
	工夫・努力	チーム形成、課題解決、他職種理解のために行った工夫や努力。
	利用者	保健医療福祉サービスの利用者に接した反応。
	新しい	本実習の経験とそれまで経験してきた学びとの違い
グループ	役割	リーダーシップの発揮、チームメンバー各々が担う役割。
	運営に対する提言	IPW実習をより深い学びの機会にするための提言。
	ディスカッション	実習を通して行われたディスカッションの意義と効果。
	ルール	チーム形成のうえで学生が決めたグランドルールや、チームの中に生まれた暗黙のルールと、それによるチーム活動上の効果。
	歩み寄り	チームメンバーの専門的発言や思考に対して理解しあう態度と行動。
	感想	グループ活動を通しての感想、得られた経験、気づき。
	リフレクション	実習中に毎日行われた「リフレクション(課題解決およびチーム形成に対する振り返り活動)における気づき
	打ち解ける	チームにおける話題の広がり、チームの一体感。

(18) 日本福祉心理学会 (平成 26 年 12 月 7 日, 狭山市)

保健医療福祉の現場における専門職連携教育実習の意義と課題

—参加学生のレポートの質的分析—

大部令絵 (埼玉県立大学大学間連携共同教育推進事業担当)

I 目的 現在、職種間が連携しつつ保健医療福祉関連のニーズのある利用者や家族の支援が求められており、大学教育では、専門職連携を学ぶ教育プログラムを開発、実施している (埼玉県立大学編集, 2009)。本研究では、専門職連携実践実習 (以下、IPW実習) の最終レポートの質的分析を通して実習の意義と課題について検討することを目的とする。

II IPW実習について IPW実習は「地域の保健医療福祉の場で、体験を通して連携と協働を学ぶ」ことを目的とした、埼玉県立大学4年生必修科目である。当初は当大学と埼玉医科大学 (選択科目) の2校で開始されたが、現在は城西大学、日本工業大学も一部グループに参加している。実習目標は①利用者・集団・地域の理解と課題解決のプロセスを体験する、②多領域の相互理解のプロセスを体験する、③チーム形成のプロセスを体験する、④この体験を振り返り、意味づけ、自分の課題を見出す、の4種である。

実習において参加学生は、学科混合の6名グループで保健医療福祉施設に配属され、「施設内のサービス利用者に対するケアプランを検討する」課題への取り組みを通じ専門職連携を実践的に学ぶ。

III 方法 本研究では、2014年8月の4大学によるIPW実習後に提出された52名分の最終レポートを分析対象とした。レポートの文章を文単位で分割、4つの目標をもとに内容の類似性にもとづいて分類した。なお、本研究は埼玉県立大学倫理委員会の承認 (受付番号25096) を得て行われた。

IV 結果 実習の目標を大カテゴリ、大カテゴリで記述の類似性に基づいた小カテゴリを設定し、記述内容をもとに小カテゴリの命名を行った。結果、小カテゴリとして、①【情報収集の方法】【課題解決の方法】、②【専門用語】【考えの相違】、③【コミュニケーション】【チーム形成の技法】【ツール】、④【個人に対する振り返り】【チームに対する振り返り】【意味づけ】【課題】が挙げられた。また、上記の大カテゴリに含まれない記述を分類したところ、【個人の活動】【チームの活動】【感情】が記述されていたことが示された。

V 考察 参加学生は個人の振り返り、チームの振り返りを活かし、専門職間での課題解決や考え方の多様性を学んでいた。これらは、大学や学科の異なる学生が一堂に会し、保健医療福祉の現場で実践を通じて感じられたこととして記述されており、各学科において従来行われてきている専門分野単独の実習にはない学びが得られていると考えられる。

また、参加学生の記述からは、専門用語やチーム形成に関してその場での気づきを得るものもみられたが、他方で実習に臨むうえでの戸惑いに関する記述もみられた。したがって、4大学による実習の事前学習として、専門性を越えた共通基盤となりうるケアの概念などを学ぶプロセスが必要であり、そのための教材研究、学習形態の検討をすべきであろう。

VI 文献 埼玉県立大学編集 (2009) IPWを学ぶ—利用者中心の保健医療福祉連携—。中央法規。